

図書紹介

「子どもと一緒に覚えたい 毒生物の名前」

ふじのくに地球環境史ミュージアム 監修 加古川利彦 絵

発行 マイルスタッフ 発売 インプレス 定価 本体 1900 円

紹介者 清邦彦

野外観察でキノコを見つけると
まず聞かれるのが

「これ、毒？」

毒と知ると

「食べるとどうなる？」

名前や生態などよりも中毒症状の方ばかりに関心があるのは本能的なものかもしれない。毒とか危険というものには怖いもの見たさのような不思議な魅惑がある。

本書はフグの一種キタマクラから話題のヒアリやセアカゴケグモ、猛毒で知られるトリカブトなどの毒生物、危険生物を、出会いやすい、間違えやすいものを中心に40種をイラスト付きで紹介している。浜辺に打ち上げられたカツオノエボシなどその鮮やかな青色につい拾ってしまいかねない。スベスベマンジュウガニなんて名前からしておいしそうだ。ススキの葉を三角に丸めたカバキコマチグモの巣は開いてみたくなる。仏前に供えるシキミの実はスパイスの八角によく似ている。ブドウに似たヨウシュヤマゴボウの赤紫の実はいち摘んでみたくなる。万一の時の症状や処置法も具体的に書いてあり、自然観察にかかわる人には必携の書だと思う。

本書の特徴はそんな実用的な面とはまた別に、それぞれの種ごとに1ページを使った美しいイラスト、読みやすい解説から、毒を持つというある種の妖しげな魅力的な生物の読み物として楽しめるところにある。うんちくネタの仕入れにだってなるだろう。ヒョウモンダコは危険を感じると噛む前に青い斑点を光らせて警告する。ツキヨタケが光るのは胞子を運んでくれる虫を呼ぶため。イチイの果肉は運んでもらうため食べられるが中の種子は傷つけられないように猛毒。カバキコマチグモの母親は生まれた



子どもたちに自分の体を食べさせる。人間から見れば厄介者であるが、毒生物とは言え彼らの生き残り戦略に敵ながらあっぱれと感心してしまう。

ただ危険性を強調するだけでなく、ガンガゼウニも危険だけどビーチサンダルで岩場に行くことの方が危険だとか、外国人から見れば猛毒のフグを刺身で食べようとする日本人こそ危ないなど、一段と高い視点から毒生物を含む自然界全体を俯瞰している。

危険だからと言って子どもを自然から遠ざけてはいけない、毒生物をすべて駆除しようとするのはすべての生き物を殺してしまいかねない、毒生物がいるのは豊かな証拠、自然の側からすれば毒をまき散らしているのは人間の方ではないか。大切なことは正しい知識を持って適切に対処すれば大抵の危険は避けられる。そんな自然に対する思想が貫かれている。